

島根県の兵庫県との研究連携の取り組み

丹羽野 裕

はじめに

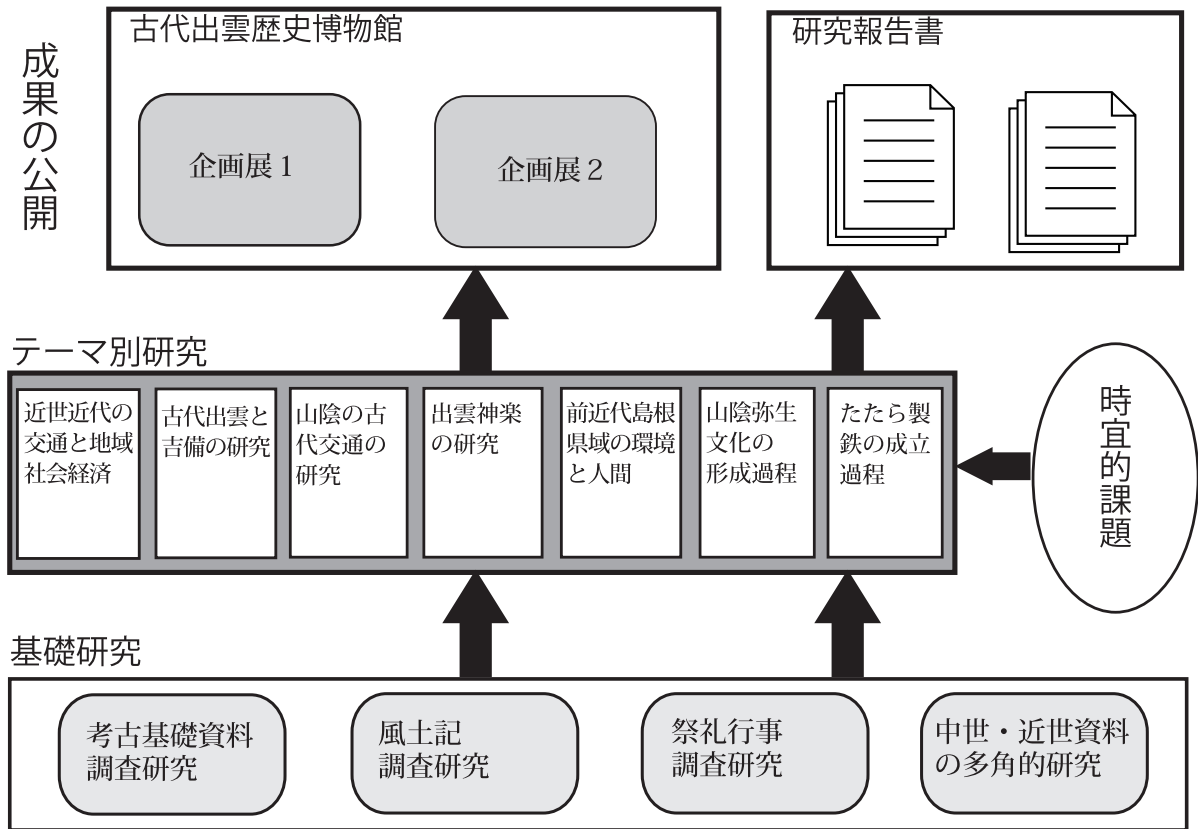
島根県では平成三〇年度より、ひょうご歴史研究室と相互の研究会やシンポジウムなどに職員を派遣するなど、研究連携を行い協力しながら事業を進めている。自治体の枠組みを超えた連携は大きな困難を伴うことが多いが、小さな試みとはいえ成果を上げていると考えている。ここでは取り組みの概要を、経緯も含めて紹介したい。

一、島根県での調査研究のあり方

兵庫県との研究連携について述べる前に、理解を助けるため島根県の調査研究の体制と概要を紹介

介したい。島根県では教育委員会内の文化財課の内室として古代文化センターを設置している。古代文化センターの業務は、島根県の特徴ある歴史文化についての調査、研究、情報発信である。そのほか文化財課の管轄下には、古代出雲歴史博物館、埋蔵文化財調査センターなどがあるが、それらの機関の学術的調査研究についても、多くは古代文化センターの企画と予算配分の中で行われている。

古代文化センターの調査研究は、大きく分けて基礎研究とテーマ別研究からなっている。基礎研究は名の通り、基礎的な資料収集と整理を行うもので考古、風土記、文献（中近世）、民俗の分野別に実施している。これら基礎調査の成果や時宜にかなった課題の中から、島根県を中心とした歴



令和元年度島根県古代文化センターの調査研究

史文化の特定テーマを選び、おおむね三年間をかけてテーマ別研究を行っている。テーマ別研究の成果は、古代出雲歴史博物館で開催する企画展として市民に公開するとともに、専門的な成果は報告書として出版している。

それぞれの調査研究は、古代文化センターの職員が中心的に担うこととなるが、職員の専門分野に応じて古代出雲歴史博物館や埋蔵文化財調査センターの職員も担当し、チームとして実施している。また内部の職員だけではなく、テーマ・分野の第一人者に客員研究員として研究に参加していただいている。客員共同検討会には担当職員、客員研究員、テーマに応じたゲストスピーカーなどが参加し、より広い見地から研究を深められるようなシステムとしている。

二、ひょうご歴史研究室との研究連携の経緯

背景 兵庫県との関係は、現在兵庫歴史研究室の坂江渉研究コーディネーターに島根県古代文化センターテーマ別研究の客員研究員に就任いただいた

たことに端を発する。同室の古市晃客員研究員にも、折に触れて古代文化センターの検討会や講演会などに参加いただいていた。両氏は「播磨国風土記」研究を中心に、地域の歴史についてフィールド調査を通じて研究されており、「出雲国風土記」を研究の核の一つとする古代文化センターの研究と相通じる部分も多いため、テーマ別研究の客員研究員としても研究を進めていただいていた。

とりわけ坂江氏は、島根県との深い交流の中で古代文化センターを核とした島根県が行っている調査研究のシステムが、行政で研究を進めるうえで目指すべき一つの方向だと感じられ、兵庫県にも取り入れるべきだと行政関係者に進言されていたと聞いている。それがひょうご歴史研究室の開設にどれだけ影響があったかは定かではないが、研究室が開設された平成二七年にアドバイザーとして研究会に出席された佐藤信東京大学教授（当時、島根県古代文化センター企画運営委員でもあった）からは、島根県古代文化センターのあり方を参考にするるとよいとのサジェッションがあったと

いう。⁽¹⁾ また二〇一五年に淡路島の松帆から銅鐸七点が出土し、翌年にはそのうちの二点が島根県の荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡出土の銅鐸と同範であることが判明したことは、両県の協力関係を進める空気感を醸成するのに役立つたといえよう。

発端 直接的な連携は平成二八年二月にたたら製鉄研究班の研究会で、古代出雲歴史博物館の角田徳幸交流・普及課長が研究報告を行ったのが最初である。平成二九年九月には、藪田貫ひょうご歴史研究室長から丹羽野（当時島根県教育庁文化財課長）に、研究を連携して行いたいという相談があり、丹羽野が内諾して持ち帰って、古代文化センターとして調査研究事業の「風土記調査研究」に位置づけて実施する方向で協議したのが組織的連携のスタートである。藪田室長の提案は、単に研究協力を行うことにとどまらず、成果の共有とコンセンサスの形成を経て、最終的には両県の博物館での共同企画展を見据えた包括的なものであった。

島根県としては、従来から『出雲国風土記』の調査研究を行うなかで、『播磨国風土記』との比

較研究や播磨での風土記登場地などの調査を坂江渉氏らの協力を得て実施してきており、その活動を充実させて組織化することに関して異論はなかった。展示については、島根県古代文化センターが行っていた、たたら製鉄に関するテーマ研究の成果を発表する企画展が平成三一年度（実質開催は令和元年度）に予定されており、ひょうご歴史研究室のたたら製鉄研究班との共同事業化も検討されたものの、開催までの時間が足りないことなどから見送ることとなった。

連携の開始 以上の経緯を踏まえ、平成三〇年二月四日に淡路市で開催された「ひょうご歴史研究室『淡路島』に丹羽野文化財課長と平石充古代文化センター専門研究員・佐藤雄一主任研究員が参加。その場で山下課長はじめとした兵庫県教育委員会文化財課の職員や藪田室長はじめとしたひょうご歴史研究室スタッフと協議を行い、島根県と兵庫県で連携研究していくことを合意した。そこで当面島根県古代文化センターとひょうご歴史研究室が窓口となり、相互の調査研究でかかわりのある研究会、検討会、情報発信事業への参加、調

査、報告等を自県経費で行うこととなった。

三、研究連携の取り組み

平成三〇年度 具体的取り組みは平成三〇年度（二〇二〇年四月）から、古代文化センターの事業の中に位置付けて実施した。ひょうご歴史研究室からは、古代文化センターのテーマ研究「たたら製鉄の成立過程」への参加とともに、淡路島地域に

池淵報告



における古代史をテーマとした調査・研究への参画を打診され、兵庫県事業の中で島根県教育委員会の職員が、研究報告や情報発信事業での発表などを行うこととなった。具体的な研究テーマとしては、五世紀の倭王権との関係が想定されたため、報告者として島根県教

育庁文化財課の池淵俊一調整監が適任と考え、庁内で調整を行ったうえで決定した。

同年五月には島根県の丹羽野、池淵が淡路の現地調査を実施、九月には玉作り関係遺物や山陰系土器が出土している木戸原遺跡や雨流遺跡の調査を実施するとともに、南あわじ市で行われた『播磨国風土記』研究班第二回研究会において、池淵が淤宇宿禰伝承、野見宿禰伝承と倭王権について事前報告を行っている。これを受けて平成三十一年



平石報告

二月二日に南あわじ市福良地区公民館で行われたシンポジウム「淡路島の海人と地域間交流―五世紀の倭王権・播磨・出雲―」で、池淵が「淤宇宿禰・野見宿禰伝承と倭王権」と題して基調報告を行うとともにパネルディスカッションにパネラーとして参加している。

令和元年度 平成三十一年度（令和元年度）は、六月に兵庫県立歴史博物館で行われた『播磨国風土記』研究班第一回研究会に丹羽野教育庁参事と池淵調整監・平石古代文化センター主席研究員が出席し、古市晃客員研究員の基調報告をもとにした検討に参加するとともに、シンポジウムの内容についての協議に参加し、平石が基調報告を行うことを決定している。九月二十九日には第二回研究会において平石が「『出雲国風土記』からみた出雲西部と倭王権」と題したシンポジウムの事前報告を行い、ディスカッションの方向性等の検討に参加している。一月三〇日には「古墳時代の印南野と倭王権」をテーマに、兵庫県立考古博物館でシンポジウムが開催され、平石が報告者、パネラーとして参加している。

四、兵庫県との研究連携の意義

風土記研究の発展 島根県では、古代文化センターを中心に歴史文化の調査研究を業務として行っているが、その中核の一つが『出雲国風土記』にか

かわる調査研究である。全国で唯一ほぼ完本で伝わる古風土記であり、地名や地理的探究が容易なうえ、年々増えていく考古資料との比較研究ができるなど、歴史研究におけるその有効性はいうまでもない。一方で『出雲国風土記』を比較研究して相対化する作業も欠かせない。そもそも古風土記は、五国しか残っておらず、『播磨国風土記』はその中でも最も近い国であると同時に、出雲にかかわる記載も認められる。島根県古代文化センターは独自に他国の風土記との比較研究は着手していたものの、地域に根を張らない研究には限界がある。その意味で、地域研究の一環として『播磨国風土記』調査を組織的に行う兵庫県との研究連携は、計り知れない意義がある。史料としての書誌的研究は基盤として必要なことは言うまでもないが、古代の地域研究をする上での風土記利用の方法論とその実践を共同して検討し、共有できる部分は共有することで、合理的で客観的な研究を進められることへの期待は大きい。

実践として、令和元年度にひょうご歴史研究室が印南野という地域をピックアップして、考古学

からのアプローチと連動した研究を行い、それに直接アクセスできたことがあげられる。第一回研究会では、地域における風土記記載と考古学的アプローチを結び付けて地域史を語ることに、懐疑的意見も出ていたが、島根県として方法があることを主張し、次の研究会に向けてのテーマの内容についてかわると同時に、平石の報告の提案まで行っている。それは前述した九月二十九日の研究会、十一月三〇日のシンポジウムで結実した。考古学上の新たな知見 平成三〇年度に実施された淡路島の海人と倭王権の研究では、島根県にとって望外の成果を上げることができた。当初、『日本書紀』仁徳即位前期にみられる淤宇宿禰伝承での淡路海人との関係が主題で、それが出雲と大和との交通路を推測されるものとして着手した。ところが地元調査において花仙山産の可能性が高い碧玉片が木戸原遺跡から出土していることが確認でき、交通路としての出雲く播磨く淡路く紀伊く大和という玉にかかわるラインを考古資料として想定できるようになった。玉作にあたっては、紅簾片岩が弥生時代から砥石として利用されており、

紀伊との関係性、ひいては忌部氏とのかかわりが想定されてきていたが、それを後押しする好資料の発見といって過言ではない。問題意識を共有することで今後の史料の増加や検討の深まりをも期待できるといえよう。

今後の展望 二年間だけでも一定の成果の共有ができたことは、今後の研究連携に大きな期待を抱かせることとなった。風土記を媒介とした地域研究は、異なる風土記から地域を見る視点を共有することで、より広い観点と両地域の関係性の研究に展望を開くものとなった。古代前半の研究における風土記研究の重要性を、両県でアピールしていきたいと考えている。

また考古学上の連携関係ができたのも大きな成果である。これまで報告書や論考の中でしか両地域の関係性にかかわる資料を検討することができなかったが、今後は直接的な職員間の交流や検討で、直接・間接的な関係性を見出せる機会が増えることは間違いない。多くの資料の中で埋没しがちな関係資料を掘り起こし、両地域の職員の目で検証が進められれば格段の研究の進展が期待でき

る。

上記のような個別具体的な研究の進展は言うまでもなく、二つの地域の学際的なつながりができたことは非常に大きなことと私はとらえている。地域同士の研究の連携はこれまで個人的な人間関係で支えられてきた面が大きい。これが業務として組織的に連携することで、それぞれの調査研究事業にお互いが直接にかかわり、今後も新たな課題や思いがけない関係性が見出していけることと期待している。

おわりに

兵庫県と島根県の研究連携に当初から関わってきたものとして、この事業の内容と展望について概観してみた。現在島根県と兵庫県は、埋蔵文化財調査を中心に一四県が連携して研究を行う古代歴史文化協議会に属して共同研究を実施している。この共同研究はやや高みに立った研究にならざるを得ないものの、大きな成果を上げてきている。それに併行して二つの地域を深くつなげる研究を

行うことで、地域研究は大きな進展をするものと考えている。今後の連携が長く続くよう努めることが重要である。

- (1) 三島伊都子「活動記録」(『ひょうご歴史研究室紀要』創刊号、二〇一六年)。
- (2) 古代歴史文化協議会『玉』二〇一八年。